

男子腋窩副乳癌の一例に就いて

金沢大学医学部久留外科教室(主任 久留勝教授)

川 崎 悦 子

Etsuko Kawasaki

(昭和29年11月30日受附)

緒 言

副乳に發生する腫瘍は、Cohnkeim がこれを以て氏の腫瘍發生説の一根拠として以来、一般に注目されるに至つたが、その数は極めて少なく殊に副乳癌腫としては、外国でも Martin, Färster 等の報告10例を出す、本邦に於いては、渡辺、中村、井上の2報告を見るのみである。

而もこれらの症例はすべて女子の副乳癌であつて、男子の副乳癌の報告は私の寡聞未だこれを聞かない。

私は、当外科に於いて男子副乳癌の一症例を経験したのでここにこれを報告する。

症 例

患者： 畑○吉○郎，66歳，農夫。昭昭24年9月16日初診。

主訴： 左腋窩の腫瘤形成。

家族歴： 特記すべきものなし。

既往歴： 22歳の時梅毒，淋疾。40歳の時に胃病。

又、若年時より発汗し易く、皮膚病にかかり易し。

21歳にて結婚，子供3人。嗜好は酒，煙草共に少々。

現病歴： 約10年前，偶然左腋窩に小指頭大の腫瘤を發見。疼痛なきままに放置せる處，6年前より該部を覆う皮膚が湿疹狀に瀰漫するに至つた。10日前より左前膊に知覚鈍麻を訴えている。

現症： 体格並びに栄養中等，眼瞼結膜炎あり，左顎下淋巴腺腫脹す。左前膊に知覚鈍麻部あり，左手握力減退（右手20，左手10），全身皮膚乾燥し色素沈着による斑点一面に見られる。胸部，腹部諸臓器に著変を認めず。両側乳腺共に異常なし。

局所々見： 左腋窩中央稍々前縁寄りに鶏卵大の腫瘤ありて，その中央部の指頭大の部は半球狀に突出す。突出部の皮膚は緊張して光尖を有し暗赤色を呈し，突出周囲の皮膚は湿疹狀に糜爛し惡臭を放つ。腫瘤は硬度軟骨様，深部と固く癒着し殆んど移動性欠く。この主腫瘤の前端並びに上端に接して，なお夫々指頭大及び小指頭大の軟かい腫瘤を触れる。顎下に

はソラ豆大の淋巴腺1個を触れる。

診断： 左腋窩副乳房より發生せる癌及びその転移。

手術及び術後の経過： 6月26日局所麻痺にて左腋窩腫瘤の全剔出並びに淋巴腺の廓清を施行。経過順調にして3週間後全治退院し，半年後，1カ年半後の検診にも何ら再発の徴は見えなかつたが，術後2年1カ月頃より手術癒痕部に軽い硬結及び上膊の軽度の膨大，疼痛を認めるようになり，現在全身の瘦削甚だしく且つ，高度の悪液質を呈し，左腋窩の手術癒痕部に鳩卵大の弾力性硬度を持つた，周囲と硬く癒着した腫瘤を認め，左上膊は約2倍に膨隆し且つ，高度の疼痛を訴え，そのため運動不可能の状態にある。又，右乳腺に大豆大の軟骨硬度を持つた可動性の腫瘤を触れ，右腋窩に小指頭大2個，右鎖骨上窩に小指頭大1個の淋巴腺腫脹を触れる。

剔出標本肉眼的所見： 腫瘤は小鶏卵大で境界不明瞭，周囲と癒着し，硬度は弾力性硬度。剖面は灰白色髓様を示す。皮下組織著しく増殖し，黄白色髓様をなして腫瘤周囲及び2個の娘腫瘤内に充満している。

同時に剔出された深部腋窩腺は主腫瘤と類似の所見を呈していた。

組織学的所見： 腫瘤は概ね乳腺腺癌の像を呈し，

一部單純癌に近い像を示す部分もある。即ち、腫瘍細胞は円柱状或いは骰子状で、ヘマトキシリンに淡染する可成り大きな核を有し、多くは多層に排列して腺腔を囲む像を呈するが、一部では充実性の胞巣を作り單純癌を思わせる像を示す。核分裂像は至る所に認められる。周辺部の腫瘍細胞巢は、増殖せる腺組織中に浸潤性に発育している。

腫瘍の周囲及び娘腫瘍の内部にはアポクリン汗腺が

高度に増殖してこれを占め、腺管拡張、上皮増殖高度にして車輪状、樹枝状増殖をなし、且つ細胞の異型もあつて前癌状態の像を示すが、固有膜の破壊、浸潤性増殖の像は認められない。

なお腫瘍の周辺部で上記アポクリン腺との境界部に癌化せざる腋窩乳腺組織を見る。

摘出淋巴腺には固有構造全く認められず、すべて腫瘍組織によつて充されている。

考 察

人類に於ける乳房は胸部前面に左右一対、対照的に存在するのを正常とするが、時には種々の他の部位に、過剰な1個乃至数個の、痕跡的なものから乳汁分泌をなすに至る乳房を見ることがある。これが即ち副乳と呼ばれるものであるが、必ずしも稀有のものではなく、原一質の統計でも本邦女子に2.36%、男子には1.35%、平均1.91%に於いて見られるという。

その成因に関しては種々憶説があるが、今日に於いて Schultze の述べている如く、乳腺発生時 Milchleister から生じた乳丘の中、発育の過程に於いて通常消失すべきものが発育残存するとの説に略々定説を見たようである。

従つて発生部位に関しても Milchleister に相当する部位、即ち Schultze 氏像と呼ばれる両側前腋窩線膨隆部より両側乳腺を経て両側鼠蹊部に至る線上に発現するといわれている。

しかし乍ら、副乳の中は Schultze 氏像上以外の部位に見られる場合も少なくないのである。これを説明し得るものとして近來、従来の副乳に対し、Mamma aberatae なるものが区別されて來た。

これは胎生期に乳腺の一部がその母地から分離して正常乳腺周囲の皮下に迷い出たものであつて、謂わば或る程度迄発達した胎生期乳腺と見做さるべきものであり、正常乳腺とは全く分離して任意の部位（主に前腋窩襞から腋窩にかけて）現われ、前述の副乳に比して悪性変性の傾向著しく、極めて臨床的興味を有するものとして注目されている。

しかし乍ら、従来の文献に於いて組織学的には両者を区別し得る所見が見出されず、臨床的にも紛らわしい場合が多いので、本症例に於いてもこれを形態的に両者に就いて所属を定めることは非常に困難と思われる。

1902年、Heide はこれらの副乳を組織学的に次の三者に分類した。即ち

1. Mikromamma 小乳房
2. Poly-od. Hypertherien 多乳嘴
3. Subcutanemamma 皮下乳房

小乳房とは乳腺、排泄管、乳壘、乳嘴を有し、色素の沈着を認めるもので、正常乳腺の唯、形の小さなものである。

多乳嘴とは乳壘、乳嘴及び色素の沈着はあるが、重要な乳腺及び排泄管を欠くものである。

皮下乳とは腋窩に限定して存在し、皮下に乳腺のみを有し、乳嘴、乳壘を欠き、排泄管開口部も毛根部汗腺の排泄口と一致するものである。

以上の如き分類によつて腋窩乳腺なるものを容認したが、この腋窩乳腺の発生に関しては、乳腺迷芽となすもの、表皮、毛囊の上皮が増殖延長して乳腺に移行せりとなすもの、又 Seitz はアポクリン汗腺の変型移行によると述べる等、論争盛んで未だに定説を見ないのである。

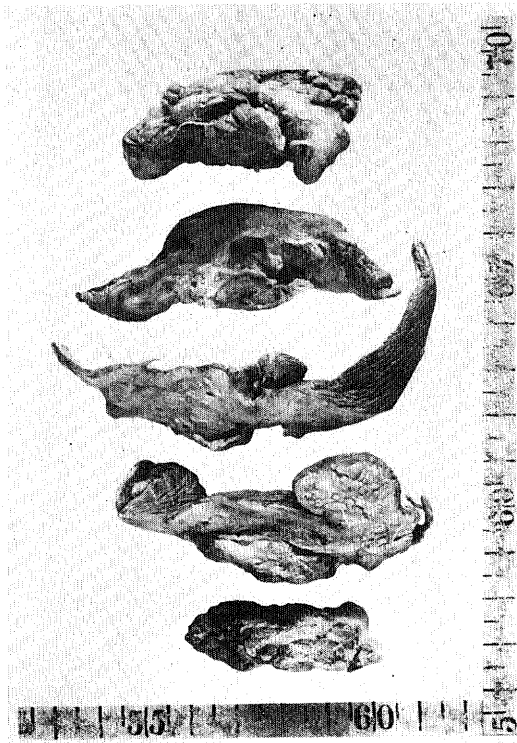
本症例は腫瘤が左腋窩に存し、乳嘴、乳壘と思われるものを認めず、而も皮下に正常乳腺組織が存在する点から、上記 Heide の分類を以てすれば、腋窩副乳房を母地として発生したものと推定して差支えないであらうと思われる。

第 1 図



左腋窩副乳癌における左腋窩の腫瘤形成。

第 2 圖



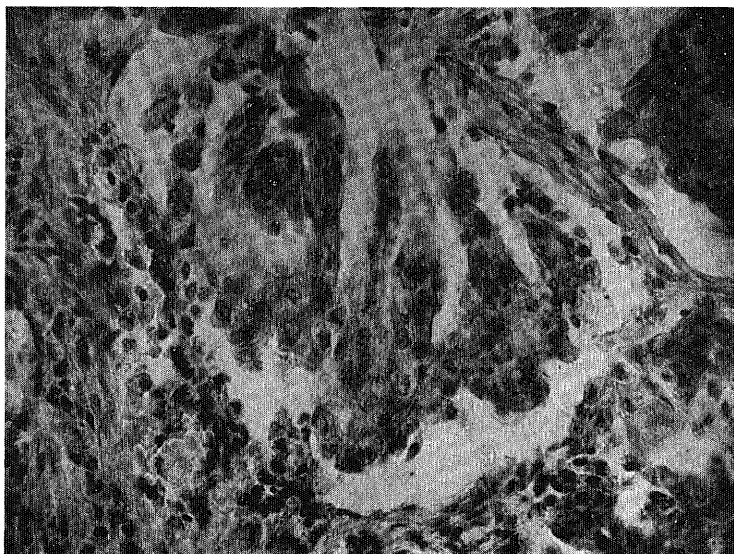
左腋窩副乳癌における摘出標本剖面

第 3 圖



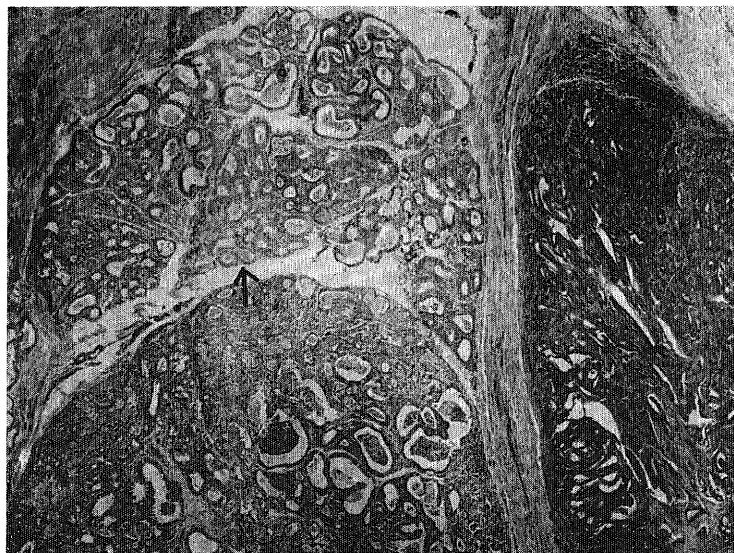
左腋窩副乳癌における腺癌像。(20倍, H.E 染色)

第 4 図



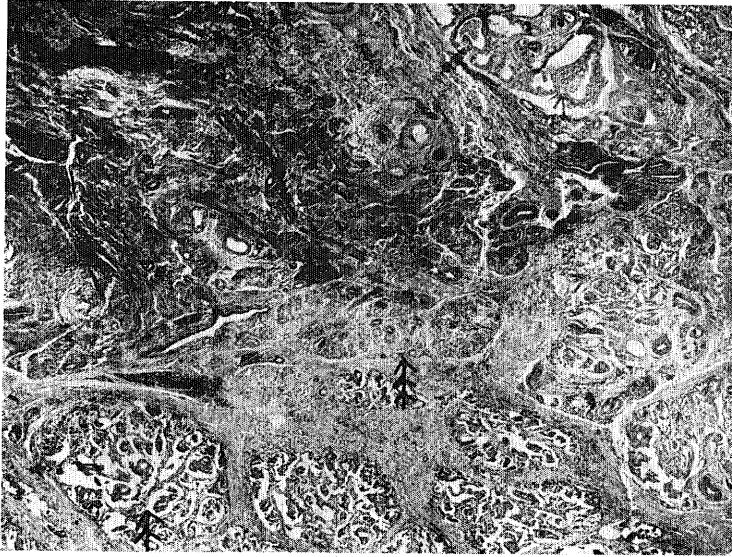
左腋窩副乳癌における腺癌像 (写真 3) の口部の拡大。
(420倍, H.E 染色)

第 5 図



左腋窩副乳癌におけるアポクリン汗腺の増殖 (↑印).
(35倍, H.E 染色)

第 6 圖



左腋窩副乳癌におけるアポクリン汗腺増殖部 (↑印) と腺癌部 (↑印)
との中間に見られる正常乳腺組繊 (↑印).
(20倍, H.E 染色)

患者の年齢は、男子乳癌の好発期といわれる50～60歳の年齢にあり、組織学的所見も大部分に於いて、志田原の男子乳癌統計に於いて最多とされている腺癌像を呈しているが、他の女子の副乳癌の症例では、井上の報告による乳嚢性纖維腺癌を除いてはすべて単純癌像を示している。

治療としては、乳癌同様に腫瘍の根本的切除並びに淋巴腺の廓清が必要であることはいう迄

もない。

男子乳癌は女子乳癌に比して脂肪組織少なきためか非常に周囲組織への浸潤早く、予後は極めて悪いとされ、又副乳癌に於いても記載あるものでは永久治癒の報告は見られない。本症例に於いても2年1カ月頃より再発を来し、又右側乳腺に乳癌の異時性発生と思われる腫瘤及びその転移を認めた。

結

66歳の農夫の左腋窩に存在した皮下乳房より発生したと思われる癌腫（腺癌）の一臨床例を報告した。

論

摺筆するに当り、終始御懇篤な御指導、御鞭撻を賜りました恩師久留教授に対し、衷心よりの深甚の謝意を表する次第であります。

文

- 1) **Cohnheim** : Martin による. 2)
Förster : Martin による. 3) 原・箕 :
 副乳. 近世医学, **9**, 554—567 (1921). 4)
Heide : Zur Genese der Achselhöhlenmilchdrüse Arch. Gyn. **68**, 74—89 (1903). 5)
 井上 : 副乳癌に就て. 東西医学, **2**, 781—785 (1935). 6) **Martim** : Beitrage zur Lehre von der Polymastie u. ihren Beziehung zur Entwicklung von Brustdrüsengeschwulste. Arch. klin. Chir. **45**, 880—891 (1893). 7)
Piccagli. Gregoris : Carcinoma mammaris

献

- aberrante. Z. org. Chir. **89**, 365 (1938).
 8) 志田原 : 男子乳癌に就て. 日本外科学会雑誌, **36**, 204—221 (1935). 9) 牧本 : 日本婦人に於ける妊娠及び産褥時の腋窩乳腺と腋窩汗腺, 及び副乳の臨床的観察と組織形態学的研案, 並に腋窩乳腺の本態を追求してその発生論に及ぶ. 日本産婦人科学会雑誌, **20**, 353—390 (1925). 10) **Seitz** : Ueber die Achselhohlenmilchdrüsen und deren Genese. Arch. Gyn. **88**, 94—131 (1909). 11) 渡辺・中村 : 副乳腺癌腫に就て. 日本外科学会雑誌, **31**, 590—569 (1930).